The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語による大学国際化の可能性
Author(s)	野杁，彩世
Citation	令和元（2019）年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書．2020
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75972
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式６

申請先学部　法学部　採択番号　No.　6

２０１９年度大阪大学未来基金【住野勇財団】学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

ふりがな 氏名	のいり　さよ 野杁　彩世	学部 学科	法学部国際公共政策学科	学年	３年
ふりがな 共同 研究者氏名	まつもと　りょうすけ 松本　亮介	学部 学科	法学部国際公共政策学科	学年	２年
	やまぐち　しんいちろう 山口　真一郎		法学部国際公共政策学科		２年
	よしおか　みさき 吉岡　美沙希		法学部国際公共政策学科		２年
アドバイザー教員 氏名	山内　直人	所属	国際公共政策研究科		
研究課題名	日本語による大学国際化の可能性				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。記入にあたっては、「大阪大学学術情報庫 OUKA」に掲載されるため、**必ず様式４の（２）の注意に従い作成すること**。（先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。）				

１．研究目的

日本の大学・大学院では、国際化のために英語カリキュラムの導入を積極的に進めている。しかし英語で講義を行える教員の数は限られており、多くの学生の英語力は大学での専門知識を学ぶに十分とは言えず、大学においてすべての授業を英語で行うことは現実的ではない。一方、日本の大学に来る留学生の半数以上は中国人で、高い日本語能力を持った学生も多く、「下手な英語講義より日本語講義の方が分かりやすい」という声も多い。そこで、本研究では大学国際化のもう一つの選択肢として、日本語による国際化の可能性を調査することを目的とする。

上記目的達成のために、世界においてどのように日本語教育が行われているのかを明らかにする。より具体的には、どれほどの人口が日本語を学んでいるのか、どのような機関や団体が日本語教育を行っているのか、そこでの教育の内容、日本語学習者の日本語能力レベル、日本語を学ぶ人々の中でどのような人が日本に留学をしたいと考えているのか、などについて調査を行う。

大学の国際化＝英語化の固定観念を打破し、日本語による国際化の可能性を探ることが研究の新規性である。日本語教育の拡大と日本語話者の増加の実態を調査し、日本語による大学国際化のメリット・デメリットを検討することなどにより、日本語による国際化の可能性を考察する。

２．調査方法

まず、インターネットや文献を利用して、世界における日本語教育の現状を調査する。具体的には、日本の大学・大学院の留学生の出身国と日本語レベル、日本語学習者・日本語教育機関の分布、海外における日本語教育の実態、留学生が日本を選ぶ理由や日本の大学に求める要素などを調査した。

次に、中国全体の日本語教育の拠点である北京日本文化センター、北京外国語大学日本学研究センターを訪問し、現地での日本語教育の実態を調査する。具体的には、日本語学習者の日本語能力、日本語学科のある大学の中国内分布や教育内容、日本への留学者数の推移やその理由などを調査した。

また、日本に留学意思を持つ中国人学生にインタビューとアンケート調査を行う。具体的には、日本語の被教育年数と日本語レベル、日本への留学を希望する理由、大学を選ぶ際に重視する要素、日本に

留学後の進路希望などを調査する。

さいごに、日本における留学生への日本語による高度教育の可能性、日本語による大学の国際化を行う際のメリットとデメリットを考察し、日本語による大学国際化の方向性についてまとめる。

３．調査結果

３．１．　世界における日本語教育の現状と日本の留学生の特徴

はじめに、日本語教育がどの程度普及しているのか、どういった学生が日本へ留学に来ているのかを、インターネットを利用し調査した。

海外における日本語教育の実態

国際交流基金による 2015 年度の海外日本語教育機関調査によると、日本語教育の実施が確認できたのは 130 か国であり、機関数は 16,179 機関、教師数は 64,108 人、学習者数は 3,655,024 人であった。教育段階別にみると、中等教育が機関数、学習者数が最多で、最も浸透していると言える。地域別に教員の充実度を見てみると、教員一人当たりの生徒数が 100 人を超えているのは大洋州と東南アジアであり、教員の充実度は低いと言える。さらに日本語母語教師の割合を見てみると、北米と西欧においては 70%を超えておりこの二地域は日本語を学ぶ環境が整備されていることが分かった。

現在世界 86 か国･296 都市で行われている､日本語能力試験は 2018 年に受験者が 100 万人を超えた。この増加は、日本語学習者の増加、ひいては日本語の国際的な重要性の高まりを表していると捉えられる。

日本の留学生の出身地や日本語レベル

日本の大学・大学院の留学生の総数は 298,980 人（2018 年外国人留学生在籍状況より）であり、アジア地域からの留学生が 93.4%、欧州・北米地域からの留学生が合わせて 4.5%となっている。また、出身国別でみると、中国出身の留学生が 38.4%と最も高い割合を占めている。このように、日本の留学生の大半はアジア地域、特に中国出身の学生であることが分かった。

日本語レベルについては国際交流基金による日本語能力試験の結果がその指標となるだろう。レベル別に N1 から N5 まで設定されており、読み・書き・聞き取りの三技能から能力を計る。2016 年の実績では 866,294 人が受験しており、その大半が中国出身である。中国においては高等教育段階の学習者が最多割合を占めており、中・上級レベルに達する学習者が非常に多いことが分かった。しかし、試験の合格者の分布は公表されておらず、現在日本にいる留学生がどの程度の日本語レベルであるのかをインターネットや文献から明らかにすることはできなかった。

留学生が日本を選ぶ理由や日本の大学に求める要素

留学生の留学動機は複雑ではあるが、概して経済的コスト・機会コスト・心理的コストの三つのコストと留学によって得られる様々な便益を天秤にかけて、便益に傾けば留学を選択するというものだろう。これを国家レベルに発展させると、留学生の送り出し国と受け入れ国の関係になる。留学生の送り出し要因は自国の悪条件、具体的には過小な教育の機会、質の低い教育、限られた就職の機会などが挙げられるだろうか。そして留学生の受け入れ要因は質の高い教育、豊富な就職機会、地理的近さ、文化的近さなどであろう。日本が留学先として選ばれるにはこの受け入れ要因を強化していく必要がある。

では現在日本に留学している留学生はどのような動機で留学行動をとっているのだろうか。JASSO

は出身を漢字圏と非漢字圏に分けて大学院生、学部生のそれぞれについて調査している。まず出身にかかわらず大学院生、学部生ともに学位取得が最大の動機であった。大学院生については、非漢字圏出身の留学生のほうが漢字圏出身の学生よりも就職を意識して留学していることが分かった。学部生においてもその傾向は同様であり、漢字圏出身の留学生は国際的経験や国際的考え方の取得など留学の基本動機を持つ一方、非漢字圏出身の留学生は就職する、もしくは就職に役立てるという動機を持っていることが分かった。さらに、出身にかかわらず大学院生、学部生ともに良い研究環境を留学動機として日本に留学する人が年々減っていることが明らかになった。これは他国の研究環境の向上を表しており、日本のブランド力の低下が感じられた。

調査より、漢字圏出身の留学生は国際経験を得るため、地理的な近さから日本を選んで留学する人が多いと分かった。また非漢字圏の留学生は日本での就職を主な動機として留学する人が多いと分かった。さらなる留学生の増加にはそのような動機以外を持つ人にも日本に留学したいと思えるような環境づくりや国際的ブランド力の向上が必要であると考えられる。

３．２．中国人学生の日本への留学

中国人学生の日本への留学行動について調査するため、私たちは中国での現地調査を行い、国際交流基金日本文化センター、北京外国語大学北京日本学研究センター、北京科技大学の３つの機関を訪問した。

中国における日本語教育の実態

はじめに国際交流基金日本文化センターを訪問し、主任助理の金子聖仁氏と副主任の野口裕子氏にヒアリング調査を行った。ここでは主に、中国における日本語教育の現状について詳しくお話をいただけた。

中国は日本語学習者数と日本語教員数ともに世界一位であり、日本語教育機関数も韓国、インドネシアに次いで第三位となっている。中国人が日本語を学ぶ理由としては、「ドラマ・アニメなどの日本のポップカルチャーに影響を受けたため」、「キャリア形成のため（特に、高考に利用するため）」の２つが大きい。前者について、これは近年の情報通信技術の発達により日本の文化が素早く中国に輸出されるようになった結果だろう。日本において、特に韓国のドラマや音楽が盛んに輸入され若者文化に根付いていることを鑑みても、中国におけるその状況は想像に易い。後者について、高考（普通高等学校招生全国統一考試）は、日本のセンター試験に類似したもので、大学への進学を希望するすべての中国人学生が受験しなければならない試験であり、その結果をもとに大学の合否が決定される。高考における試験科目、そのうちの外国語科目は数か国語の中から一つを選んで受験することができ、その中に日本語が含まれている。つまり、中国人が日本語を学ぶ理由として高考への利用が大きいというのは、多くの学生が中等教育における履修外国語として日本語を選択していることを意味する。これは、漢字という共通の構成要素が含まれているために日本語が中国人にとって身近で学びやすいという理由のほかに、高考の外国語科目において英語を選択すると、その試験範囲は初等・中等教育における計６年分に及ぶが、日本語を選択すると、中等教育における３年分にとどまるという点で、比較的得点がしやすいという理由によるもの。したがって英語が苦手な不学生が日本語を選択する傾向が強くある。

高等教育において日本語を学習する学生は、①日本語専攻（日本語を大学における専攻とする場合）、②非専攻第一外国語（専攻としていないが履修第一外国語として日本語を選択する場合）、③非専攻第二外国語（専攻としていないが履修第二外国語として日本語を選択する場合）に３区分される。①日本

語専攻については、学生数制限や専攻閉講の影響を受け減少傾向にあり、これは学生の実務思考の傾向によるもので、近年中国の国内企業が力をつけてきているために日系企業の魅力が減少、それに伴って日本語専攻の魅力も減少したことを背景とする。②非専攻第一外国語については、その数が①を上回っており、高等教育では中等教育における履修外国語を継続履修することが多いため、中等教育における日本語学習者の増加により増加傾向にある。③非専攻第二外国語については、第一外国語として英語を履修する学生のなかで、第二外国語として日本語を履修する学生が最も多い。

次に北京外国語大学北京日本学研究センターを訪問し、宋金文教授と費暁東講師に話を伺った。ここでも、中国における日本語教育の現状についてお話をいただいた。

近年、日本と中国の経済面における緊密性の高まりにより、日本語学習者が増えている。この傾向を受けて、多くの私立大学が日本語教育を強化するようになった。具体的には日本語学科の設置や日本人教師の誘致である。その結果、現在中国で日本語学科が設置された大学は 500 を超えた。

こうした日本語教育の需要の高まりを受けて、古くから日本語教育を提供していた国立大学も規模の拡大を目指している。しかし、授業レベルを保つためには生徒だけでなく教師も増やさなければならない。となると日本人教師の誘致が必須であるが、財源の限られた国公立大学がコストの高い政策を行うことは難しく、拡大が図れていないのが現状である。

日本への留学意思を持つ中国人学生の特徴

最後に北京科技大学を訪問し、日本への留学意思を持つ中国人学生を対象に、自身の日本語能力と留学意識についてのアンケート調査とインタビューを行った。回答を得られたのは、北京科技大学外国語学部日本語学科の 4 年生 5 名、別日程でお会いすることのできた山東財経大学経済学部経済統計学科の 3 年生 1 名、計 6 名である。

調査に協力した北京科技大学の学生のうち、4 人は 3 年間、1 人は 4 年間日本語を勉強しており、全員が日本語能力試験（JLPT）において最難関レベルの試験である N1 を合格している。N1 の試験内容は言語知識（文字・語彙・文法）・読解と聴解であり、認定の目安は「幅広い場面で使われる日本語を理解することができる」と定められている。インタビュー調査の結果、学生たちの特徴として、日本語の 4 技能（読む・書く・話す・聞く）のうち読みを得意とする学生が比較的多く、それに対し書きに苦手意識を持っている学生が多いことが明らかになった。話す能力に関しては、日常会話は問題ないと考える学生と苦手意識を抱えている学生が混在しており、日常会話はできるものの授業での発表など公の場で用いられる日本語は難しいという学生も見受けられた。聞く能力はとりわけ得意とも不得意とも認識されていなかった。また日本語学科に所属するこれらの学生たちは、文学史や美術といった科目の授業を日本語で受講した経験を持ち、専門用語など難しい用語の理解のため辞書などを利用してはいるが概ねの理解まで繋げることができたと答えている。自身の英語力については、英語の授業を大学 2 年生以来受講していないため約 2 年間英語に触れていないと答える学生が多く、それにより英語力に自信のある生徒は少なかった。

アンケート調査を基に、以下では彼女たちの留学に関する意識について述べたい。まず、彼女たちが日本への留学を希望する動機は、主に「知識・技能の習得のため」、「言語習得・上達のため」、「異文化に興味があるから」、「自分自身の成長のため」の 4 つである。一方で、「学位取得のため」や「将来海外で働くため」と答えた学生は少なく、日本での修士・博士の学位の取得、また日本での就職に伴う、日本での長期的な滞在や将来的な移住は視野に入りにくいことが見受けられた。日本の留学先としての魅力としては、その文化に加え中国からの地理的な近さが挙げられる。また彼女たちの関心のある専門

分野の研究ができる大学・専門学校や希望する知識や技能の習得ができる同機関の存在も大きいことが明らかになった。

４．考察とまとめ

最後に、研究目的である「日本語による大学国際化による可能性」について考察する。先に日本語での大学国際化のメリット・デメリットを挙げたうえで、考察とまとめを行う。

４．１．メリット・デメリット

まずは日本に視点を置いたうえで論じる。はじめにメリットについて述べる。一つ目のメリットは、教員の負担やストレスの軽減である。現在推進されている英語による国際化は、英語が堪能ではない日本人教員にとって大きな負担になる。政府も、そういった教員の英語リテラシー向上のために何らかのプログラムを講じるなどの対応に迫られる。しかし母国語たる日本語により国際化を行うことで彼らの負担やストレスを軽減・解消することができる。二つ目のメリットは、日本語での学習が望ましい科目の授業のより積極的な開講である。日本史・日本文学・日本語学・日本法などの科目は、英語を含めた言語による学習・理解が困難である場合があり、裏を返せば、日本語によって学習することで正しく深い理解を得やすい科目であると言える。こういった科目を積極的に日本語で開講することができるならば、より様々な学問の教育を留学生に施すことができ、それらの科目の研究の更なる深化を望むことができるようになる。三つ目のメリットは、日本語が堪能な外国人人材が増えることによる労働力不足問題の改善・解消である。労働力が不足している日本の現状に対し、移住外国人の登用により解決していこうとする方針が政府により掲げられているが、ここで、日本語により高等教育を受け十分に日本語を習得した外国人学生を日本の労働市場に定着させることができれば、外国人登用の幅が大きく広がり、労働力不足問題解消の一助となり得るだろう。

次にデメリットについて述べる。一つ目のデメリットは、英語能力の高い優秀な留学生を獲得できないことである。３.２で見た通り、特に中国からの留学生においては、英語力が十分とは言えず日本語の方が学びやすいからといった理由で日本語を履修・習得する者が多い。したがって、そのような背景を持つ学生に対して高い水準の能力を望むことは難しい。当然、留学生は中国だけから来るわけではないが、現状として中国からの留学生が多数であることを鑑みると、これは優秀な留学生を受け入れたいという見地からは大きなデメリットと捉えられる。二つ目のデメリットは、日本語ができる学生のいる国は中国などアジア地域に限られることである。国際化、というからには世界に向けてひらけていないといけないわけだが、実際に日本語によってそれを行ったとしても、その恩恵を受けられるのは、現状では主にアジア圏からの留学生のみだろう。日本語教育の普及していないヨーロッパなどからの留学生には、依然として英語による授業の方がわかりよいことは明白である。

今度は留学生に視点を置いてメリットとデメリットについて言及する。留学生には、母国で日本語を一定程度学んだ後に更なる日本語能力の向上を目的に来日する学生と、日本語の習得でなく他言語（主に英語）で授業を受けたり研究を進めたりする前提で来日する学生の二者が存在する。日本の文化に興味を持ち、現地での日本語の習得を望む前者は、今回アンケート調査に協力した学生を含め、現状多数想定される。実際中国で出会った学生たちは「日本語の授業を受けたい」との意思を持っており、英語の授業が彼女たちにとっての魅力となるとは考えにくい。このような学生たちにとって、日本語で授業を受けることは日本への留学において欠かせない重要な要素であり、留学生が受講可能な日本語の授業を拡大することは、これらの学生のニーズを満たすことを意味する。

これに対してデメリットは、授業内容のレベルダウンまたは授業内容の理解度の低下である。英語と日本語の世界での普及状況を鑑みると、日本に留学する学生たちの多くが日本語より英語に長けていることは容易に想像できる。したがって留学生の日本語力に合わせた授業内容と進度が求められることで授業全体の質が低下する、あるいは授業内容を保つことで学生それぞれの理解が追い付かなくなることが懸念される。

４．２．日本語による大学国際化の可能性

以上の調査結果を踏まえて、日本語による大学の国際化が可能か否かを考察する。まず、日本語学習者・日本語教育機関は世界的に増加傾向にあり、特に中国を含むアジア圏でその傾向が顕著である。それゆえ、アジア圏からの留学生に対しては日本語における授業が有効であるように考えられる。しかし一方で、アジア以外の地域、アメリカやヨーロッパなどの地域では日本語学習は十分に普及しているとは言えないため、それらの地域からの留学生に対して日本語による授業を行うことは現実的ではない。したがって、大学の国際化を一括で日本語によって行うことはいまのところ不可能だろう。

しかし、現在中国からの留学生が多数であり、彼らの日本語運用能力が比較的高いことを加味して、留学生向けの授業のうち一部を日本語で行うことは十分に可能であると言えるだろう。この実施により、４.１で挙げたメリットの実現化が可能となる。多数の重要なメリットの存在、（一部という制約の上ではあるが）実現可能性の高さ、これらを踏まえて、私たちは日本語による大学国際化を進めることを強く推奨する。大学の国際化＝英語化の固定観念を廃し、日本語という新たな可能性を見出すことで、その選択によってでしか得られない様々な利益が社会にもたらされることが期待できるだろう。

参考文献

李敏「海外における日本学研究者の育成 －北京日本学研究センターを事例に－」
ウェブマガジン『留学交流』2019 年 1 月号 Vol.94
JASSO「留学生の多様化と留学動機/就職意識の変化」
https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2018/__icsFiles/afieldfile/2019/03/08/201903satoyuriko.pdf
JASSO「外国人留学生在籍状況調査」
https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/index.html
日本語能力試験　JLPT
https://www.jlpt.jp/statistics/index.html
https://www.jlpt.jp/about/levelsummary.html
国際交流基金「2015 年度　海外日本語教育機関調査」
https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey15.html
李敏「中国人留学生の日本留学決定要因に関する研究」
https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/3/39950/20160512100225920513/DaigakuRonshu_48_97.pdf